熊本県立大学 Thanks 70th

春秋彩

Syunjusai

熊本県立大学広報誌
2018 March
Vol.48

Contents

特集 県立大学創立70周年その2 …… 2
活躍する卒業生 …… 7
国際交流 …… 8
研究活動紹介 …… 9
地域連携 …… 10
大学の動き …… 12
後援会便り …… 13
活き活き元気種 …… 14
人事情報 …… 15
おすすめの一冊 …… 15
熊本県立大学アーカイブズ …… 16

春秋彩とは

万葉集の額田王の春秋を論じた歌の題詞「春山の万花の艶と秋山の千葉の彩」から採ったもの。「春秋」には年月の意味もあり、「春秋に富む」若者を彩る学園の四季を表している。

特集

県立大学創立70周年 その2

理事長 対談 学長

創立70周年を記念して、五百旗頭理事長と半藤学長に登場いただき、
これまでを振り返りながら、「熊本県立大学のこれから」と題して対談を行いました。

地に足の着いた「地域に生きる」大学

（半藤学長：以下「学長」） 理事長が就任され、はや6年が経ちますが、就任された頃の本学の印象は如何でしたか？

（五百旗頭理事長：以下「理事長」） “地域に生き、世界に伸びる”のモットーのとおり、地域に根ざした活動は大変活発だなという印象でした。貸切バスに学生を乗せた阿蘇大水害の被災地支援や和水町の里山再生に向けた取組など、大学や学生が積極的に地域と関わっている、まさに“地に足のついた”情景に大変感銘を受けました。

学長 熊本地震でも大きな被害のなかった頑丈な白亜の建物は本学の自慢ですが、伝統に寄りかかるのではなく、常に前向きに活動することが本学の特徴と捉えていたので、そのように感じていただけていたのであれば幸いです。

平成18年に本学が法人化したことにより、教職員が“自ら考えなければいけない”と思い始めたことは重要です。地域の中の県立大学であることを意識しながら、地域に密着・貢献して信頼される大学づくりを行い、この方針に沿って取り組んできた結果が今に至る成果と考えています。

「世界に伸びる」学生の育成や「知の拠点」としての大学の役割

理事長 周囲からよく「県立大学生は大人しくて良い子だけど物足りないと思っていたが、近年何でも積極的に取り組んでいる」とお褒めの声をいただく。地域に根ざした取組は筋金入りとなっている反面、“世界に伸びる”の部分にも目を向けるべきと思い、英語に親しむ機会として、一週間に及ぶ英語漬けの合宿を進めてきました。幸い天草や阿蘇からの協力を得て現在に繋がっています。

また、県民を対象とした戦後外交史のセミナーや、4回にわたり著名人を集めて国際関係シンポジウムを開催するなど、県立大学らしい“知の拠点”づくりを模索してきました。

学長 理事長の御就任は、本学にとって“世界に伸びる”部分を伸ばす千載一遇のチャンスとなりました。高校で教えていた頃、よく生徒に「一流のものに触れ、一流のものに憧れることが向上心に繋がる」と言っておりましたところ、ある生徒が単身オスロの美術館まで行き、実物のムンクの“叫び”を見て感動した、と言いに来ました。その子は東大からシティバンクへ入り、アナリストになりました。言い続けると誰かの胸に響くものです。

「世界に伸びる」学生の育成は簡単ではありませんが、理事長に牽引いただき、学生・教職員ともに理解を深めることができました。今般の第3期中期計画策定に当たり、ますます本学の国際化を推進していきたいと考えています。

知事が提唱する「知の結集」の成果として国際関係シンポジウムを開催

理事長　蒲島知事から、「2期目の目標は熊本への“知の結集”だから手伝ってもらえないか」と言われたのがきっかけで本学の理事長となったわけですが、それを実現するために、単に有名な人を招くのではなく、世界を代表する最先端の専門家による実のある情報の発信に努めました。そこで人類史から見ても大変な激動の世界の今日、日本がどのように進むべきかという命題に対応する全４回の国際関係シンポジウムを開催して、総決算となる今年度がちょうど本学の70周年記念となりました。

学長　野田政権で“グローバル人材”が大事だと言われ、本学も人材育成を進めてきましたが、将来はそんな言葉がなくなるような世の中でなければいけません。時代は今、非常に先鋭化しており、異文化を受け入れられずに対立しています。そのような時代だからこそ、知識人は、友愛・博愛・信愛の精神を持つべきではないか。隣人を愛せる精神こそ、グローバル人材に必要であると感じます。

理事長　技術革新によって世の中が変わると考える信奉者が非常に多いが、内側にあるのは人間の心の部分であって、学長の文学者らしいとらえ方は大変いいですね。

大学は“グローカル人材”を育成し、学生は大学でその器を作っていくべき

理事長　東京一極集中が進むと地方が益々疲弊していく。あたかもタコが自らの足を食べ頭だけ肥大していくかのよう。政府もキャッチフレーズでなく実効性のある地方創生を進めていかなければならない。その中で本学は、早くから地域の“知の拠点”として堂々と今を築きあげてきたのは大変な資産であり、時代をリードしているという自負を持っていいのではないかと思います。

一方で本学の学生には、“熊本しか知らない”というのではなく、“世界を知ったうえで熊本を支える”人材になって貰いたいですね。

学長　地方創生は簡単ではない。地域が魅力ある存在となるためには、世界的な視野や知識を持ちつつ地域を支える“グローカル人材”を育成していかなければならないと考えています。これが私たちの掲げる教育上の基本的姿勢です。

理事長　若い時に強く感じたことは生涯の動力になる。４年間という限られた時間ではあるけれども、地域を愛し世界に伸びて広い視野を持って光を投げかける、そういった器を是非作っていただきたいですね。

学長　そのためには英語によるプログラムを充実させ、広く海外から留学生を受け入れ、また、地域の方々がいつでも学ぶことのできる生涯学習の拠点となり、ダイバーシティ・コミュニティを作らねばならないと考えています。

理事長　今後とも更なる飛躍を応援します。また次期理事長となる白石先生（前政策研究大学院大学学長）は、コーネル大学の教授として、またインドネシアを始め東南アジアの専門家として、大学の国際化に大いに力を発揮していただけるのではないかと思います。

理事長の御退任にあたって

理事長　私にとっての“熊本体験”は非常に鮮烈なものでした。最初は京都大学に坂本君という菊池出身の同級生で、熊本弁を話し日本の大地を踏みしめている、とても腰の据わった人と思いました。その後彼は農林中央金庫へ行き、退職後菊池の教育を支える活動をされているそうです。

二人目はやはり蒲島知事。山鹿からハーバードを経て東大教授へ、そして広げた視野をもって郷里熊本へ戻って、地域を支え、リードする存在として活躍している。

この６年間、県内各地を案内していただき、熊本の温かな人柄に触れ、郷土のおいしい食べものや素晴らしい景色に親しみ、気持ちのいい教育環境、さらに半藤学長のもと新たに進む大学の発展を見ながら、こうして今日まで過ごしてくることができたのは、本当に幸せなことだと感謝しています。

学長　私は“文学”という無限の仮想空間で生きてきた者ですが、理事長の高潔で暖かい人柄や大きな包容力など真似のできない資質に触れ、かつ、現実社会への理解や哲学を御指導いただき、広大な現実空間というものを学ぶことができました。

引き続き、向上心の溢れる大学を作ることが理事長の御指導に報いることだと思っています。６年間、まことにありがとうございました。

同志社大学村田晃嗣先生が特別講義を開催

昨年10月23日(月) 中講義室2において、国際政治学者の同志社大学法学部教授村田晃嗣先生をお招きして、「21世紀のリベラル・アーツの可能性」と題した特別講義がありました。

日本が直面する急速な人口減少問題については、かつて京都から東京へ遷都した際の人口減少問題や他国の事例など具体的な数値を交えた丁寧な解説がありました。

また、インターネットやSNSの普及により、人種や宗教等の多様化や何でもランキング化する傾向など、横と縦のグローバル化が急速に進んでいるとのお話がありました。

「大学入学時と卒業時の学力に相関性はなく、相関があるのは入学一年後の学力と卒業時の学力であり、いかに学び続けるモチベーションを持つかが重要である。また、多様化が進み、既存の秩序が塗り替えられていくような変化の早い社会で生き抜くには、可能な限り自身の知的バックグラウンドを広く持ち、特定の専門教育に限らず幅広い教養教育を身に着けておくことが大事であり、それによって自身の思い込みや偏見から自由になれる。」との言葉をいただき、約200名の受講者にとって大変充実した講義となりました。

熊本県立大学創立70周年記念植樹

昨年11月6日(月)、創立70周年記念事業の一環として、本部棟玄関前において記念植樹を行いました。

五百旗頭真理事長の挨拶のあと、理事長、半藤英明学長、同窓会紫苑会の横田桂子会長の3人の手により「ひごつばき」が植樹されました。お客様をお迎えする玄関前アプローチに、熊本県立大学の歴史を刻む新たなシンボルが誕生しました。

「熊本県立大学創立70周年記念式典 祝賀会」を開催しました!!

昨年10月7日(土)、ホテル熊本テルサにおいて、「熊本県立大学創立70周年記念式典　祝賀会」を開催しました。

行政・経済界・教育関係その他の本学関係者約100名の来賓をはじめ、紫苑会、本学教職員及び学生など約200名の参加がありました。

小泉純一郎元内閣総理大臣による記念スピーチでは、「原発はコストがかかるうえに安全ではない。自然エネルギーにシフトすべきだ。」と原発ゼロについての自身の思いを語り、参加者は小泉元総理の熱意に感心しきりでした。また、人生は常に勉強であるとの学生への激励がありました。

学生プレゼンテーションでは、４つの学生グループからそれぞれの取組について発表がありました(①教育プログラム“もやいすと育成”、② 学生 GP(地域連携型卒業研究)、③ Intensive English (英語合宿)、④ボランティアステーション)。小泉元首相や蒲島知事をはじめ、来賓の方々も、学生の発表に興味津々で耳を傾けておられました。

その後、小泉元首相から記念撮影の提案があり、思わぬ交流の機会に学生たちはみな感激した様子でした。

第10回祥明大學校・熊本県立大学学術フォーラム
「底流としての異文化　― その発現と発掘 ―」

昨年11月25日（土）中ホールにおいて、第10回祥明大學校・熊本県立大学学術フォーラム「底流としての異文化　―その発現と発掘―」を開催しました。

第10回記念の今回は、冒頭に1989年に始まる両校の交流黎明期に尽力くださった金尚珍先生（祥明大學校元教授）によるビデオメッセージが紹介されました。

「山河が無数に変わっても、両校の関係は変わることなく」と結ばれた印象深いお話の後は、早稲田大学の笹原宏之教授の講演（漢字文化に見られる重層性 ―日本の漢字を中心に―）、両校の研究者各２名の研究報告と続き、異文化間の交渉がもたらす研究上の面白さと厳しさが多彩な観点から提起されました。230名の聴衆を巻き込んでの豊かな学びの時間でした。

熊本県立大学創立 70 周年記念事業の実績一覧

（平成 30 年２月現在）

1.「熊本県立大学アーカイブ」資料の収集及び公開		熊本女子大学時代からの歴史と伝統を伝える資料の散逸・滅失を防ぎ、適切に管理していくために収集している「熊本県立大学アーカイブ」の資料について、データ化に着手し、一部を本学ホームページで公開。 また、本学の発展に寄与された方々から寄稿された記念メッセージを公開。
2. 創立７０周年記念式典・祝賀会の開催		平成 29 年 10 月7日（土）、ホテル熊本テルサ（たい樹）において開催。約 100 名の来賓をはじめ、卒業生、教職員、学生の計約 200 名が参加。 **記念スピーチ**　小泉純一郎氏（元内閣総理大臣） **学生プレゼンテーション**　本学学生の４グループ（もやいすと、学生 GP、Intensive English（英語合宿）、ボランティアステーション）
3. 記念シンポジウムその他記念イベント	公開講演会 「学部生・社会人のための大学院のススメ」	平成29年6月10日（土）、本学 CPD センターにおいて開催。 学内外から約60名が参加。 **基調講演**　高木聡一郎氏（国際大学グローバルコミュニケーションセンター准教授） 「これからのキャリア形成と大学院での学びなおし」 **パネルディスカッション**　高木聡一郎氏、澤田道夫准教授、本学大学院生３名
	国際関係シンポジウム 2017 「トランプ政権とアジア太平洋」	平成 29 年7月 29 日（土）、熊本ホテルキャッスル（キャッスルホール）において開催。 県内外から約 700 名が参加。 **基調講演**　田中均氏（㈱日本総研国際戦略研究所理事長） **パネルディスカッション**　五百旗頭真理事長、白石隆氏（JETRO アジア経済研究所長）、高原昭男氏（東京大学教授）
	特別講義 「21世紀のリベラル・アーツの可能性」	平成 29 年 10 月 23 日（月）、本学中講義室2において開催。 学生や一般の方約 200 名が参加。 **講師**　村田晃嗣氏（同志社大学法学部教授） **演題**　「21 世紀のリベラル・アーツの可能性」
	学術フォーラム 「底流としての異文化―その発現と発掘―」	平成 29 年 11 月 25 日（土）、本学中ホールにおいて、姉妹校である韓国・祥明大學校と本学との第 10 回目となる学術フォーラムとして開催。約 230 名が参加。 **講演**　笹原宏之氏（早稲田大学教授）「漢字文化に見られる重層性 －日本の漢字を中心に－ 」 **研究報告**　祥明大學校及び本学の研究者各２名の計４名による報告
	講演会 「東日本大震災とトモダチ作戦」	平成 30 年3月 14 日（水）、本学中ホールにおいて開催 **講演**　ロバート・エルドリッヂ氏（元米国海兵隊太平洋基地政務外交部次長、国際政治学者） 「東日本大震災とトモダチ作戦」 **対談**　五百旗頭真理事長、ロバート・エルドリッジ氏
	第５回食育・健康フェスティバル	平成 30 年3月 17 日（土）、本学小ホール、大学会館（学生食堂）等において開催 ・くまもと食育ガイドブック刊行記念講演会「くまもとの食と自然」（堤裕昭教授） ・野菜ソムリエ持田成子氏によるトマトのお話と食べ比べワークショップ ・その他、本学の食の研究展示「ラボカフェ」、ゆるキャラ食育ステージ、ピザづくり体験、野菜たっぷりスープの試食、連携団体・企業によるマルシェなど
	シンポジウム 「地方創生への挑戦」	平成 30 年3月 17 日（土）、本学大ホールにおいて開催 **基調講演**　佐藤正之氏（九州財務局長）、平田稔彦氏（熊本赤十字病院長）、半藤英明学長 「わが国の財政と地域の少子高齢化社会への対応」 **パネルディスカッション**　学外協力関係者３名及び本学教員６名
4. 広報誌「春秋彩」における特集		広報誌「春秋彩」の vol.47 及び vol.48（本誌）を、創立 70 周年記念号として発行。 ・Vol.47　特集を「県立大学創立 70 周年」とし、同窓会紫苑会座談会、本学のあゆみ、記念事業の紹介等を掲載。平成 29 年 10 月発行。 ・Vol.48　特集を「県立大学創立 70 周年 その２」とし、理事長・学長対談、記念事業の実績等を掲載。平成 30 年３月発行。
5. 大学イメージ動画の制作		創立 70 周年を機に、本学のイメージを分かりやすく伝える動画を平成 29 年7月に制作。５つの章ごとに完結するオムニバス形式の約５分の動画で、イベントでの上映のほか、本学ホームページ及び YouTube にて公開。
6. 記念植樹の実施		平成 29 年 11 月6日（月）、本学本部棟玄関前で実施。 五百旗頭真理事長、半藤英明学長、横田桂子紫苑会長の手により、 本部棟玄関前アプローチに「肥後つばき」を植樹。

活躍する卒業生

株式会社杉養蜂園
人事部係長　古澤陽太さん

（平成 25 年 3 月　総合管理学部総合管理学科卒業）

自由に動ける学生時代だからこそ、まずは行動を

現在、株式会社杉養蜂園に勤務しています。当社は蜂産品の製造・販売を行っており、国内では珍しい蜜蜂の飼育から商品販売まで一貫して手がける6次産業化企業です。全国の直営店舗だけでなく、アジアを中心に海外にも販路を拡大し、世界規模での挑戦を続けています。

私は人事部として、新卒・中途採用、新入社員の研修、学生のインターンシップ対応、社員のマイナンバー管理業務を担当しています。店舗の繁忙期には販売スタッフのサポートとして、国内の店舗はもちろん、海外のイベントに行くこともあります。

社内外問わず、多くの人と関わる幅広い仕事を担当していますが、「人と関わることが好き」というだけでは当然業務は務まりません。メインで行っている採用業務においては、選考結果が求職者の人生に大きく影響します。責任が伴う仕事だからこそ、①日々勉強し知識や経験を増やすこと、②経営者が描く会社のビジョンや求める人物像をリアルタイムで把握すること、③的確かつわかりやすく求職者へお話をすることを心がけています。また、営業職と同じように自分を売る仕事でもあるので、身だしなみや話し方に気をつけることはもちろん、プライベートでも様々なことに関心を持って行動に移し、その経験を日々の業務に反映させています。私が採用に関わった学生や中途社員が、入社後活躍しているのを見ると、自分のことのように嬉しく思います。

在学時はフォークソング研究部で素敵な仲間と多くの時間を過ごしました。副部長を務め、後輩の育成やイベントの運営に携わった経験は、現在の業務にも繋がっていると感じます。

ゼミでは経営・マーケティングを専攻しました。そこで学んだ知識や得た経験は、現在の業務に直接関係はありませんが、多角的な視点と差別化の重要性は、資料の作成や採用活動の企画運営をする際に役立っています。

今の学生を見て思うのは、ネットを少し見ただけで、行った・知った・やった気分になりがちだということです。自由に動ける学生時代だからこそ、興味があることについてはまず行動してみましょう。目標や理由は後付けで構いません。実際に自分が経験したことや良くも悪くもその場で感じたことが、その後の自分の強みになります。何事もまずは自分で足を踏み出して欲しいです。

国際交流
International Exchange

インドネシア・ブラウィジャヤ大学より短期研修団が初来学

平成29年12月11日から18日にかけて、本学が平成27年にMOU（学術交流に関する覚書）を締結したインドネシアのブラウィジャヤ大学より、短期研修団の学生５名が初めて本学を訪れました。

研修団の学生らは日本語の授業を受講したほか、本学のサークル（茶道部、着物礼法部、国際倶楽部）による日本文化の紹介・体験や、国際関係を専門とするゼミ（総合管理学部・高埜ゼミ）の学生との交流も行いました。12月15日に行われた成果発表会では、インドネシアの多様な文化を紹介するプレゼンテーションや、伝統舞踊の披露も行い、本学の学生にとっても異文化に触れる貴重な機会となりました。

また、日本文化体験の一環として訪れた南阿蘇村では、人生で初めての雪を目の当たりにするなど、充実した8日間を過ごしました。

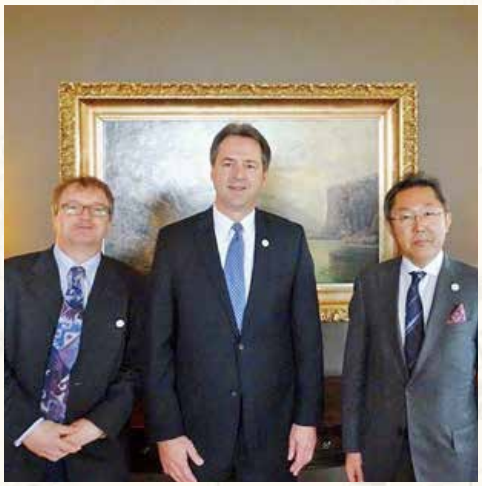
半藤学長とレイヴィン教授が米国・モンタナ州を訪問

今年は熊本県とモンタナ州が姉妹提携を結んで35周年の節目の年であることから、平成29年11月13日から16日にかけて、半藤英明学長（写真右）とリチャード・レイヴィン教授（文学部英語英米文学科長：写真左）が、蒲島郁夫熊本県知事らとともに米国・モンタナ州を訪問しました。

半藤学長らは、35周年記念式典等関連行事に出席したほか、モンタナ大学とモンタナ州立大学を訪れ、さらなる交流の発展について関係者と意見交換を行いました。

本学においても、平成９年にモンタナ州立大学と締結した協定に基づき、学生や教職員が交流を行っており、現在も２名の学生が交換留学生としてビリングス校で貴重な経験を積んでいます。

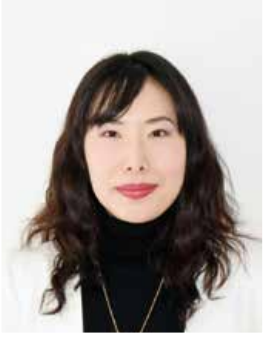
今回の訪問を機に、熊本県および本学とモンタナ州との友好関係が今後いっそう深まり、活発な交流が続くことが期待されます。



研究活動紹介

Research for Cultivating a Global Perspective

グローバルな視点の涵養を目指して



文学部英語英米文学科　講師
原　紘子

ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）大学院教育学専攻博士課程修了（2012年11月）。教育学博士（Ph. D.）。2017年4月より現職。専門分野は、異文化コミュニケーション、メディア、映像制作。現在の主な研究テーマは、グローバル・メディアが文化に及ぼす影響とグローバルな視点の育成に向けたアートベース教育の実践。

I have been putting myself in global settings (Canada, the United States, Cambodia, and Japan) through my research and teaching activities. Trinh T. Minh-ha's works made me realize the possibility of filmmaking and the inspiration I received from my supervisors and research participants in my graduate years at the University of British Columbia opened a path for me to pursue as a researcher/filmmaker. My research has mostly focused on media, migration, and identity; more specifically, the identity (trans)formation of marginalized populations (e.g., refugees, immigrants, and hyphenated people) using art for their self-expression and the visualization of an alternative space transcending the dichotomy of West and East.

本学での教育活動を通じて、若いデジタル世代には無限の可能性があり、高度な言語能力および ICT 技能を駆使し、積極的に自己表現を行う地球市民（global citizens）になっていくと日々確信しています。今後の研究としては、筆者のゼミに所属する学生たちと協力し、熊本をテーマとする日英バイリンガルの映画制作プロジェクトを実施する予定です。このような研究活動により、学生たちが「地域に生き、世界に伸びる」グローカルな人材として、新たな価値観を生み出していくお手伝いができればと願っています。

川からの風景。カナダの首都オタワにて。
（2012 年に筆者が制作した映画『The Art of Becoming』より）

日常の風景。カンボジアの首都プノンペンにて。
（2012 年に筆者が制作した映画『The Art of Becoming』より）

地域連携

地(知)の拠点整備事業(COC事業)

創造的復興支援
～天草における県大防災プロジェクト～

本学の「もやいすと育成プログラム(防災)」で学んだ知識と経験を生かし、地域の防災力向上に貢献することを目的に学生ボランティア「県大防災プロジェクトユニット」が活動をスタートさせました。天草版防災クロスロードゲームの開発にチャレンジし、昨年9月14日に天草高校全校生徒600人、1月18日に天草支援学校の生徒と保護者40人を対象に取り組みました。この他、昨年10月22日に開催した天草市民向けの「もしもに備える防災ワークショップ、もしも天草で大地震が起こったら」が天草ケーブルテレビで放送され、視聴者から依頼を受け、昨年12月10日の「子育てフェスティバル」に出展するなど、新たな繋がりと広がりが出てきています。

「くまもと未来づくりトーク2017～知事と若者が語る熊本地震からの創造的復興～」が本学で開催されました

昨年11月23日(木)大ホールにおいて、熊本県主催の「くまもと未来づくりトーク2017」(県民対話事業)が開催されました。蒲島郁夫熊本県知事と学生が熊本地震からの創造的復興について語り合うというもので、本学の学生等約280人が参加。知事講演、学生の活動発表、知事と学生との質疑応答が行われ、最後にはくまモンも飛び入り参加しました。

講演では、まず自らの半生について語ったうえで、「県民の総幸福量の最大化」を目標として取り組んだ蒲島県政の実績について説明がありました。また知事3期目の初日に起こった熊本地震への対応として、「痛みの最小化」、「創造的な復興」、「更なる発展」を復旧・復興の3原則に掲げて策定した「平成28年熊本地震からの復旧・復興プラン」の説明がありました。

続いて、本学学生の4グループが、それぞれの活動について発表しました。またそれぞれの発表の中で活動内容に関連した、「被災した子どもたちへの支援」、「文化財の復旧」、「防災意識の啓発」、「熊本地震の風化防止」について、知事と学生との間で質疑応答が行われました。

最後に知事や発表した学生らとの記念撮影を行い、会場の学生と交流が行われました。

学生 GP

平成29年度学生 GP (地域連携型卒業研究) 公開審査会を開催

学生 GP は、自治体や地域の企業からテーマを募集し、それを学生が卒業研究として取り組む制度です。今年度は、9つの研究グループが誕生しました。学生 GP には、「初期報告会」「中間報告会」「公開審査会」と3回の研究発表会があり、昨年12月14日に公開審査会が開催されました。公開審査会では、連携する自治体や企業の方々の前で発表を行い、優秀な発表をしたグループには、表彰状が授与されました。各卒業研究の詳細について詳しくは、大学ホームページ(「学生 GP 制度(地域連携型卒業研究)」のページ)をご覧ください。

食育

祝　学食再開・食育活動表彰農林学食で食育メニューとデザート

昨年9月29日の学食再開から約1ヶ月間、健康的な食生活のサポートを目的とした、食育メニューが提供されました。このメニューは、食育推進プロジェクトが設定した「野菜100g 以上使用、10品目以上使用、熊本県産品使用、塩分控えめ、カラフル」をコンセプトとしていて、使用野菜の種類や量の情報提供も行いました。期間中には、食育的観点から素材を厳選した食育デザートビュッフェや食育活動表彰受賞の展示も行い、たくさんの方にご利用いただきました。

◇ 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+事業）

高校と大学の連携による農林水産業の強化を目指す「2017　高大連携勉強会」開催

「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の一環として、昨年12月1日（金）に本学総合管理学部大演習室で「2017　高大連携勉強会」が開催され、高校・大学・高専の教職員や自治体関係者、それに学生等65名が参加しました。（株）アグリコミュニケーションズ津軽代表取締役社長・佐藤晋也氏（元青森県立五所川原農林高等学校校長）の基調講演（テーマ「６次産業化推進と農業教育」）のあと、農林水産業の成長を目指す高大連携の意義と課題に関して、教育関係者によるパネルディスカッション（モデレーターは地域活力創生センター長・松添直隆教授）が行われました。

「山の都で明日への活力増強を～農泊で癒やしと新体験～」山都町で COC+ シンポジウムを開催

昨年12月16日（土）、山都町矢部保健福祉センター千寿苑で農泊と地域の活性化をテーマにシンポジウムを開催しました。山都町民や学生等110名が参加。梅田穰・山都町長の来賓挨拶のあと、須川一幸氏（（株）地域振興研究所長）の基調講演（「農泊で、地域の宝物を活用せよ！」）、堺章氏（熊本学園大学教授）の報告（「学生とともに探る山都町の魅力」）、淺野弘幸氏（九州農政局農村計画課）の事例報告（「農泊と地域の活性化」）がありました。また、地元の若手農業経営者２人にも加わってもらい、松添直隆・本学地域活力創生センター長がモデレーターとなってパネルディスカッションを行いました。このうち宮崎県五ヶ瀬で農泊を指導した須川氏は、地域の人々の合意形成の重要性を指摘されました。

◇ 研究活動支援

水産大臣賞受賞記念ビュッフェが提供されました！

「2017くまもと地域振興フェアーワンダーメッセ」に出展

昨年10月26日、27日に行われた、「2017くまもと地域振興フェアー_ワンダーメッセ」（主催：肥後銀行、くまもと地域振興フェアー実行委員会）に本学ブースを設けました。

本学が取り組むプロジェクトの活動や成果の報告とともに、研究内容や保有技術などを幅広くＰＲしました。

２度目の参加となった今回は、マイクロバブルの実演やＶＲ／ペーパークラフトなどの体験型展示に加え、研究のパネル展示も行いました。普段なかなか触れる機会が少ない大学の取り組みを、来場者の方々に知っていただく良い機会となりました。

大学の動き

次期理事長白石隆氏就任記者会見

1月16日（火）午前9時30分から、県庁において蒲島知事、五百旗頭理事長、白石次期理事長の三者による記者会見が行われました。

白石次期理事長は、「アジアでは、国家間だけでなく都市や地域間でも協力・競争するようになっている。そういう環境で楽しんで仕事をする人を育てたい」とし、「教職員とコミュニケーションを図り県民の期待に応えていきたい。」と抱負を語りました。

3月に退任となる五百旗頭理事長からは、「海外の大学で研究する者は多いが、大学に請われて教壇に立つ者は少なく本物力がないとできない。県立大学の積極性が世界に展開して欲しいと思っているので、白石氏に後を継いでいただけるのは素晴らしいことだ」と太鼓判を押してエールを送りました。

また、「熊本地震の直後から、くまもと復旧・復興有識者会議の座長として携わることができてよかった。阿蘇水害や熊本地震でボランティアに取り組む学生の積極性がうれしかった。」とこれまでを振り返りました。

蒲島知事からは、「白石先生は、知名度と世界的な視野、大学運営の知見という理事長の要件を満たす人材で国内にそうはいない」とし、「最も尊敬する学者のひとり。県立大学や熊本県を外部に発信していただきたい。」と期待を寄せました。

また五百旗頭理事長に対しては、「言葉では言い尽くせないほど感謝している。今や熊本と切っても切れない縁ができた。」とし、「今後も熊本への御支援をお願いしたい。」とねぎらいました。

白石氏は1950年生まれの67歳。愛媛県出身。東京大学教養学部卒業後米コーネル大学で博士号を取得。同大教授、政策研究大学院大学学長を経て現在ジェトロアジア経済研究所長。

第4回 国公私3大学環境フォーラム(in 熊本県立大学)を開催しました!!

昨年12月9日(土)、長崎大学環境科学部、福岡工業大学社会環境学部と本学環境共生学部が連携して、中ホールにおいて、第4回「国公私3大学環境フォーラム」を開催しました。国公私の垣根を越えて、環境科学に関するディスカッション・ポスター発表等を実施。学生・教育関係者など数多くのご参加があり、充実したフォーラムとなりました。

1）日時：平成29年12月9日(土) 12:50～18:00
2）場所：熊本県立大学 中ホール(16:15まで) および学生食堂（ポスター発表および懇親会）
3）プログラム：基調講演 講演者：末石 富太郎 氏（大阪大学 名誉教授）
パネルディスカッションⅠ　社会科学から見た環境科学（震災・災害と環境科学）
パネルディスカッションⅡ　自然科学から見た環境科学
（地球環境問題から地域環境問題(環境共生)へ）

総合管理学部本田研究室がISFJ日本政策学生会議で分科会賞を受賞しました！

昨年12月２～３日に明治大学駿河台キャンパスで行われたISFJ日本政策学生会議の政策フォーラムにて、総合管理学部本田研究室の学生が分科会賞を受賞しました。

同会議は、「学生の政策提言による望ましい社会の実現」を理念とする学生シンクタンクであり、学生による研究と政策提言を募っている組織です。この政策フォーラムでは、産官学それぞれの領域から専門家がコメンテーターとして参加し、政策の評価とアドバイスを受け、論文評価と合せて受賞論文が決定されます。今年度は、大阪大学や慶應義塾大学など25大学48研究会117班が参加している中、数少ない参加地方大学の一つとして本学も参加しました。

本田研究室では、2015年度から統計データと統計学・計量経済学を駆使して、様々な社会科学に関する諸問題の研究成果を同会議で発表しており、今年度は２グループが参加のうえ、両グループ共に参加分科会内で最も評価が高いと認められる「分科会賞」を受賞しました。

《労働雇用③分科会賞》（写真上）
上大田菜々、佐々木香澄、真下由美、松永悠
「『不本意型』非正規雇用の活路」

《経済産業①分科会賞》（写真下）
江口ほの香、金田芽惟、島田莉香、下川友希
「非国際化企業の生産性向上 ―企業ミクロデータを用いた実証分析―」

後援会便り

後援会では、学生活動支援事業として、各サークルの活動、白亜祭（学園祭）の開催、熊本県立大学体育祭（通称「PUKリンピック」）の開催、九州地区大学体育大会（インカレ）出場等に必要な費用に一部助成を行っています。
2017年11月11日（土）、12日（日）に開催された第53回白亜祭では、熊本県立大学創立70周年ということもあり、後援会から学内イベントに広く活用されるようテント及び三角コーン一式の贈呈及び、特別支援金の贈呈を行いました。
前年の白亜祭で好評だったLEDスクリーンを設置することでステージも盛り上がり、夜間は、創立70周年企画としてライトアップされた県大川も色鮮やかに演出されていました。

後援会とは（ホームページ：https://www.puk-kouenkai.jp/）

●本学学生の保護者またはこれに準ずる方を会員として組織されています。
●大学の教育事業を後援し、大学と家庭及び社会との協力によって、大学教育の成果をあげることを目的としています。

後援会の事業 次の４つの事業を中心に学生の活動全般を支援しています。

《就職対策事業》
●就職対策講座（公務員試験対策、就職活動実戦、ITパスポート試験対策、簿記検定試験対策、行政書士試験対策、宅地建物取引士試験対策、ファイナンシャルプランナー、秘書技能検定対策、二級建築士受験対策）の助成又は開催経費の助成、資格取得及び講座受講等助成
●就職セミナー・各学部による就職支援事業・在学生就職アドバイザー配置支援、PROGテスト（社会人基礎力の測定）・TOEIC ® IP学内試験への実施支援、学内合同企業セミナー設営支援・福岡地区合同企業説明会参加助成、就職・進学写真代助成、保護者用就職ガイドブック配付

《学生活動支援事業》
●サークル活動費助成、白亜祭・PUKリンピック開催経費助成、体育委員会主催リーダーズトレーニング・サマーキャンプバス代助成、全国大会等出場助成、ボランティア保険料助成　等
●学生用カラーコピー機の設置、コピーカード配布・販売、学生からのリクエスト図書の購入、防犯ブザー貸出、食育支援

《国際交流推進事業》
●海外留学助成、留学対策講座助成、留学生による学生等向け語学講座開講支援　等

《教育研究推進事業・その他》
●共同自主研究への助成、現地学習バス借上助成、インターゼミナール大会等への参加助成
●卒業式のガウン貸与、卒業記念品贈呈　等

※新入生へは、本学合格通知の際に、後援会の説明及び入会・会費納入のお願いをしております。
まだ未加入の方は、充実した学生生活を送るためにも後援会事業を御理解いただき、是非ご加入ください。
途中年次であっても随時入会を受け付けております。

活き活き元気種

このコーナーでは、地域で活躍する熊本県立大生の声をお届けします。

軟式野球部

浦田　駿（総合管理学部３年）

今回は、軟式野球日本代表として九州で唯一の選出、２年連続代表入りは全国23代表中わずか５人、という快挙を成し遂げた浦田選手に、生い立ちから現在に至るまで、そして今後の抱負などについてお尋ねしました。

―― 浦田選手はどんな人？

浦田　175cm72kg と野球選手として決して大柄ではありませんが、常に考えて動く野球を心がけています。野球を始めたきっかけは、祖父と父が野球好きで、その影響で自然と幼稚園の頃からキャッチボールを始め、強豪校の菊陽西小学校では１番ショートとして九州大会３位の成績でした。その後九州学院中学と熊本北高校（硬式）の計９年を経て県立大学へ入学しました。県立大では軟式野球部があると聞き入部しました。

―― JAPAN の代表となって見えたものや感じたことは？

浦田　代表に選ばれた時は、嬉しさとともに、代表としてやれるかという不安と、やってやろうという意気込みに奮起しました。特に今回の選出は、九州大学軟式野球連盟の委員長としての自覚をもって強い気持ちで臨みました。

２年連続選出は、昨年度からの成長も首脳陣の査定ポイントに加味されるので、選考の際他の選手よりも厳し目に見られるようです。また全国から集まる選手をにわかにチームとしてまとめる統率力も同時に求められることとなり、プレー以外のプレッシャーも加わります。

グアム遠征は、２回とも12月第１週から１週間かけて行ってきました。戦績は、通算して全米各地域の延べ９チームと対戦し、８勝１分け。個人成績は通算５試合出場し、内野手として12打席中４安打（８出塁）でした。

JAPAN のトレーナーが行うストレッチなどトレーニング法はとても合理的で、また試合を想定したケースバッティングやノックは、より実践的で大変勉強になりました。現在本学野球部でも取り入れています。

滞在中は、チームの仲間と同じ部屋で野球やプライベートなど大いに語り合い、大変仲良くなりました。特に同じセカンドのポジションを争うライバルの坂本君（東北福祉大３年）や、チームのまとめ役である寺地さん（京都文教大４年）は、今後の野球人生にとって大変刺激を受けた人です。

―― これまで辛かったことやお世話になった方は？

浦田　菊陽西小学校の頃指導を受けた工藤監督や坂口コーチには、厳しい練習もさることながら、あいさつやゴミ拾いの大切さなど人間形成も併せて教えていただきました。ここで技術面だけでなく、現在に至る野球への取組の基礎ができました。

それから、来る日も来る日も朝早くからお弁当を作ってくれた母や、いつも応援に駆けつけてくれた祖父や父には、普段なかなか言えませんが本当に感謝しています。特に野球を始めるきっかけを作ってくれた祖父は、僕が大学入学の直前に亡くなってしまったので、僕の JAPAN のユニフォームは見せてあげられませんでしたが、今回帰国後しっかりと報告させていただきました。

―― 最後に今後の抱負と後輩にエールをお願いします。

浦田　これからも県立大軟式野球部を引っ張っていき、大学の名を全国に知らしめたいです。また卒業後もずっと野球を続けていきたいので、今後社会人野球部のある地元企業に就職できるよう就活していきます。

後輩やこれからこの大学を目指す人たちには、とにかく尊敬できる人やライバルとたくさん出会った方が良いと思います。そこで刺激を受けたり、負けたくないという思いが自分をここまで成長させる原動力になったと思います。

また、具体的な目標をもって着実に積み重ねることが大きな成果に繋がると思います。

人　事　情　報

● 採用（平成30年4月1日付）

【文学部】

英語英米文学科	講　師	野々宮　鮎美
英語英米文学科	講　師	吉田　希依

【環境共生学部】

食健康科学科	講　師	中嶋　名菜
食健康科学科	助　教	谷村　綾子

【総合管理学部】

総合管理学科　公共・福祉部門	准教授	西森　利樹
総合管理学科　公共・福祉部門	講　師	関　　智弘

● 就任（平成30年4月1日付）

副学長	堤　　裕昭
文学部長	鈴木　　元
環境共生学部長	松添　直隆
総合管理学部長	進藤　三雄
文学研究科長	虹林　　慶
環境共生学研究科長	北原　昭男
アドミニストレーション研究科長	森　美智代
地域連携・研究推進センター長	丸山　　泰
学術情報メディアセンター長	村尾　治彦
文学部　日本語日本文学科長	米谷　隆史
文学部　英語英米文学科長	吉井　　誠
環境共生学部　環境資源学科長	石橋　康弘
環境共生学部　居住環境学科長	辻原　万規彦
環境共生学部　食健康科学科長	松﨑　弘美
総合管理学部総合管理学科　公共・福祉部門長	吉村　信明
総合管理学部総合管理学科　ビジネス部門長	黄　　在南
総合管理学部総合管理学科　情報部門長	宮園　博光
総合管理学部総合管理学科　基礎総合管理部門長	江﨑　一朗
キャリアセンター長	宮園　博光（兼任）
保健センター長	下田　誠也
地域活力創生センター長	松添　直隆（兼任）

● 昇任（平成30年4月1日付）

文学部	准教授	原　　紘子
環境共生学部	教　授	髙橋　浩伸
総合管理学部	准教授	石橋　　賢

● 退職（平成30年3月31日付）

文学部	教　授	飯村　英樹
文学部	准教授	木村　　洋
文学部	講　師	ブアリブ アラン
総合管理学部	教　授	三浦　　章

おすすめの1冊

ロボット法

— AIとヒトの共生にむけて

平野　晋・著

弘文堂・2017年
本体価額 2,700円（税込み2,916円）
ISBN978-4-335-35714-5

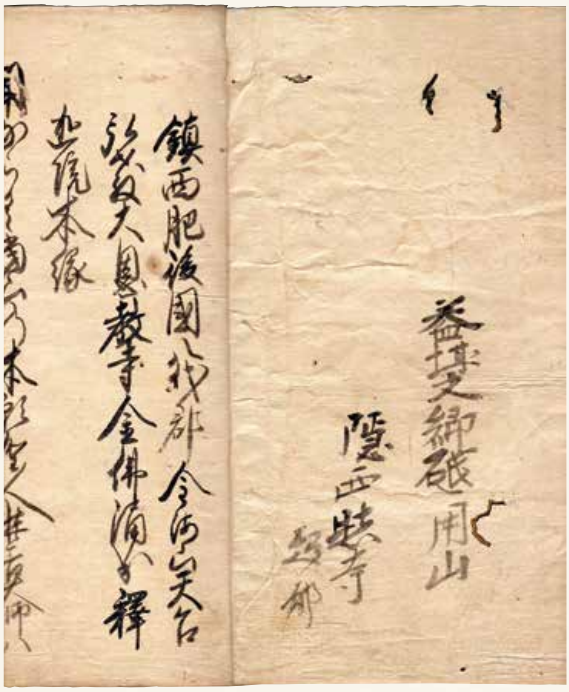
法律は日進月歩のテクノロジーに対して追いつくことができるか

SFの世界では昔からロボットやAIによる光と闇が主題となっているが、現実の世界でもたとえば高齢者による運転ミス等への対応策として自動運転システムが実用段階に入っている。しかし、それを規制する法律の整備については議論が始まったばかり。一例として、自動運転システムについて衝突の危険が生じた場合の自動停止装置は実用化されているが、もしそのシステムに不具合が生じて衝突を回避できなかった場合の損害賠償責任の所在はどこにあるのか。いわゆるロボット法については近年外国における研究は急速に進んでいるが、日本での研究は緒に就いたばかりである。しかし、今後ロボットやAIが普及することを考えると法律の整備は急務である。本書はロボット法分野に造詣が深い法学者が諸外国の研究を紹介し、日本における研究の先駆けとなるものである。

総合管理学部
教授　**吉村　信明**

熊本県立大学アーカイブズ

Archives of Prefectual University of Kumamoto



金海山大恩教寺釈迦院本縁

江戸時代中期の写本一冊。八代市泉町の天台宗寺院、通称「釈迦院」の開基である非善の出生から遷化までを記す。あわせて、金色の釈迦如来の涌出という奇瑞による釈迦院の草創、鳥羽院の時代に釈迦院が焼失しながらも、岩松の梢に如来像と非善自作の尊像が出現した奇跡等を描き、寺伝ともなっている。『肥後国誌』は釈迦院の縁起として、寛文八年に禅瑞の著した一書の存在を指摘し、同書により「釈迦院」の項を記しているようだが、本書はこれとは異なるようである。末尾に嘉承三年（一一〇八）の奥書を有し、にわかにはその年時は信用し難いものの、注意すべき本である。なお、後ろに「釈迦院の七不思議」なる記事を付載しているのも面白い。

見返しには「益城之郷砥用山／隠西照寺／超郁」との識語があり、砥用郷興正寺村の西照寺に伝わった本であることが知られる。

（文責：文学部 教授　鈴木　元）

「春秋彩」へのご意見･ご感想をお待ちしています。

本誌についてのご意見・ご感想を下記までお寄せください。
いただいたご意見は、今後の広報誌編集の参考にさせていただきます。
〒 862-8502（住所記載不要）
熊本県立大学企画調整室「春秋彩」担当行
FAX 096-384-6765　E-mail kikaku@pu-kumamoto.ac.jp

発行：熊本県立大学
〒 862-8502 熊本市東区月出 3 丁目 1 番 100 号
TEL 096(383)2929（代）
http://www.pu-kumamoto.ac.jp/